『中外日報』平成８年１月１日付（25402号）5-7面

震災関連記事のみの抜粋です

中外雑記

臨黄

二百二十人の被災体験

●妙心寺派　宮下玄覚地蔵院住職は、震災の日以来、被災者支援のボランティア活動に奔走してきたが、大学生ボランティアなどの協力を得て被災者二百二十人震災体験を手記やインタビューによってまとめ、近く刊行する。震災の記録を永く後世に伝えるため、特定の範囲に限らず、広く市民のあらゆる層、年代から無差別に体験談を取材したもの。十七日に発行する予定で、震災物故者遺族などに贈呈する、という
▽宮下住職がＭＥＭＯＲＩＡＬ９５１１７というグループをつくって現在進めているのが“仮設住宅に花いっぱい運動”。「“こころのケア”の必要が語られているが、私は精神科医ではないので専門的なことはできない。そこで、花をコミュニケーションの材料として、仮設住宅の住民の間でこころのつながりをつくってもらおうとこの運動を始めた」と宮下住職は語る。布教目的の“ボランティア”が仮設住宅居住者から不評を買うなど、被災者支援活動のあり方も難しくなっているが、宮下住職らの運動はあくまでも住民の自主性に任す。花壇のブロックを運んだり、プランターを設置したりしたあとは、不必要な介入はしない。それでも仮設住宅に出入りするうち、被災者の間で発生しつつある新しい問題が見えてきて、寝たきり老人のため寝具調達に走り回ったりすることになるという
▽花いっぱい運動の資金は個人的なコネクションもフルに活用して、至る所に協力を呼びかけ確保している。仮設住宅に寝具を贈るためには知人の旅館の女将を通じ、有馬温泉旅館組合に支援を求め、これに応えて二百セットの寝具が提供されたという。また宮下住職の呼びかけに応え、四十年来音信のなかった中学時代の同級生からも義援金が送られてきた。不屈の意志と根気をもって継続してきた宮下住職らの運動は徐々にその輪を広げている。

社説

物から心への価値観の転換を

　明けましておめでとうございます。新しい年を迎えると新しい希望がわいてくるものである。今年がよい年であることを誰もが願うのが年の始めである。
　昨年は大へんな年であった。まず、年の始めの一月十七日午前五時四十六分頃、近畿地方の兵庫県、淡路島を震源とした大地震が起きた。阪神大震災（兵庫県南部地震）である。戦後の地震としては未曽有の大地震であった。その甚大な被害は現在までも及んでいる。この地震によって戦後五十年の努力と経済的奇跡が大地に呑みこまれてしまったように感じられた。
　さらに三月二十日朝、ラッシュで混雑する東京都内の地下鉄でサリンガスがまかれ、死亡者を含め多くの被害者が出た。それは無差別殺人を狙う組織的犯行であり、それは人間の感覚を失った無差別なテロ犯罪であり、日本のみならず世界の人々を震駭（しんがい）させた。それはオウム真理教による犯罪であり、その恐るべき人間性を無視した犯罪行為が次々にあばきだされ、現在、裁判が進行中である。
　この二つの大事件のうち一方は自然による大災害であり、他方は人間による凶悪な犯罪であるが、社会に与えた影響はともに大きい。阪神大震災は一九八〇年代の日本を支配した経済的・技術的優越感の時代に完全にピリオド

を打った。それは日本の「傲慢の時代」の終焉を意味した。敗戦後このかた、日本人の自分を見る目が今ほど一変したことはない。ほんの五年前までには、日本の繁栄は未来永劫にわたって続くものと思われていたからである。

オウム真理教の事件も日本の社会に強烈なインパクトを与えた。戦後教育の問題や、人間性に対する自覚の欠除など、多くの識者からさまざまな意見が出された。宗教学者はテレビの討論会などで意見を述べたりした。これを宗教界や仏教界に限ってみても、多くの問題があることを晒けだすに至った。真の宗教とは何か、真の仏教（法）とは何かということの反省も起こった。さらに重要なことは、オウム真理教事件にこと寄せて宗教法人法の改悪を強行したことである。昨年、宗教界に与えた最も大きな政治的事件は、あらゆる自由権、あらゆる人権の基本である「信教の自由」を侵害する宗教法人法の改悪を、村山富市政権とその与党（自民・社会・さきがけ）が、民主主義の精神も手法もかなぐり捨て、ゴリ押しにゴリ押しを重ねて強行してしまったことであった。このたび、中外日報社から創刊百周年記念出版の第一冊として刊行された堀口慈恵著『仏教の原点を問う－オウムと宗教法人法をめぐって』は、宗教法人法改悪の問題を、単に法律の問題としてだけではなく、仏教の優れた思想を再確認しながら、政治と宗教、国家と宗教、文化と政治の問題の本質を明らかにして世に問うたものである。

ところで昨年は敗戦後五十年に当たり、いろいろな方面で戦後五十年の記念行事が行なわれた。暮れの十二月十八日には国家的行事としてそれが行なわれた。日本の侵略戦争に対する徹底的な反省を行なうべき節目にあたって、韓国や中国から抗議を受けるような首相や閣僚の無反省な発言があいついだのも昨年であった。中外日報社は日本の大陸政策を検証する取材班を中国に派遣し、南京大虐殺記念館のある南京を初めとして、瀋陽、盧溝橋などを訪問し、日本軍による大規模な組織的計画的な侵略行為を検証し、侵略戦争に対する正しい歴史的認識を確立して、戦後五十年の反省としたのである。中外日報社本間昭之助社長が昨年十月、北京においてこの事を発表した時、中国の知識人は、本間社長の実地検証の重みと、侵略戦争に対する反省の言葉に、大きな感動と称賛の言葉を惜しまなかったのである。

戦争の記憶は政治的な問題であると同時に道義的な問題である。そして、道義的な問題こそが政治にも大きな影響を及ぼすことを銘記しなければならない。だからこそ、政府の正しい歴史観と日本人個人々々の歴史観が重要な意味を持つのである。日本人がアジア諸国との関係において、歴史を直視し、過去から学ぶことを始めたのは五年ほど前からにすぎない。天皇の戦争責任（法的にも道義的にも)、従軍慰安婦の問題、細菌兵器の開発と人体実験を行なっていた陸軍七一三部隊の存在、公式謝罪、賠償要求といった問題が、盛んに論議されるようになったのはつい最近にすぎないのである。戦後五十年にして日本とアジアの諸国が戦争の記憶を共有できるようになったといえよう。

昨年五月、ヨーロッパでは世界の元首が一堂に会して、第二次世界大戦のＶＥデー（ヨーロッパ戦勝記念日）五十周年の式典が行なわれたが、いつの年にか、八月十五日の終戦記念日に日本、韓国、中国、シンガポールなどの首脳が一堂に会して記念写真に納まることができるであろうか。現在の状況では実現しそうにないのが現実である。

ところで、戦後五十年目の昨年の事件について述べたが、それは新年を迎える決意をより鮮明にするためである。まず阪神大雲災によって大自然の恐ろしさを実感することができたが、人間と自然との共生ということがいかに大切であるかを反省する契機にもなったと思う。物質文明が繁栄した結果、科学による自然環境の汚染が重大な問題になっているのも現代の特徴である。熱帯雨林の伐採、工業・生活廃水による河川や湖沼の汚染、フロン・ガスによるオゾン層破壊など地球自身が大きな被害を受けつつある。

東洋思想には昔から自然と共生する思想がある。自然を改造し征服し利用するのではなく、自然と一つになり、自然の恩恵に感謝し、自然と共生しようとする。「鳥語虫声も、すべてこれ伝心の訣なり。花英草色も、見道の文に非ざるはなし」(『菜根譚』）という言葉があるが、小鳥のさえずりや虫の鳴く声も、すべて宇宙にあまねく満ちわたる真理をあらわした文章でないものはないという。ちょっとした小鳥の声や虫の鳴き声が、宇宙のいのち、自然のいのちを伝えてくれるのである。秋に鈴虫の鳴く音色を聞いたりすると、秋の訪れを知る。あるいは、春、梅が咲けば、春がきたことがよくわかるものである。都会にいても、冬、一輪の梅が咲いているのを見ると、そこに自然のいのちを感じることができる。

また「一枝を擢秀（たくしゅう）するを見ば、便ち無限の生機を触れ動かす」(同上）という言葉もある。ふと花

を咲かせている一枝を見ると、それが、そのまま限りなく発展するいのちのはたらきであることがわかるというのである。自然のいのちを感得することができれば、自然と共生しなければならぬという考え方が自ずと生ずるはずである。

オウム真理教の事件でみられるように簡単に人間を殺すことができるような思想は恐ろしい。自分たちの集団が敵視する弁護士のいたいけな子供までも殺害するに至っては、人間の所行ではなくて悪魔の所業というしかない。このような行為が平然とできる人間を育てた原因はさまざまあるであろうが、何よりも人間性を歪めた科学万能の思想がはびこっていることが重大である。今こそ新しい年を迎えるに当たって価値観の転換をはかることが大切である。

それは物から心への価値観の転換である。確かに二十世紀の科学、技術の発達は、人類に豊かな物質文明をもたらすことができた。だが同時に、科学や技術の真理こそ唯一の真理であるという錯覚を人々が持つに至った。そのため目に見えない心の世界とか、正しい宗教が無視されるに至ったのである。哲学者の西田幾多郎博士は「宗教的要求は自己に対する要求である。自己の生命に就いての要求である。我々の自己がその相対的にして有限なることを覚知すると共に、絶対無限の力に合一して、之に由りて永遠の真生命を得んと欲するの要求である。(中略）現世利益の為に神に祈る如きはいふに及ばず、徒らに往生を目的として念仏するのも真の宗教心ではない」(『善の研究』）と言っている。

無限なるもの、永遠なるもの、目に見えないものに対する畏敬の念を持つことが大切である。正しい宗教を若い人々に身をもって（実証を示して）教える使命感を持つことが仏教界に強く望まれる所以である。物から心への価値観の転換を新年の課題にしようではないか。

真言

「宗教の時間」に出演

●高野山　鷲林寺（兵庫県西宮市鷲林寺町）の藤原栄善住職は十四日に読売テレビ系（日本テレビ系）の全国ネットで放映する「宗教の時間」に出演し、震災を中心に語る。同番組の今回のテーマは「こころを語る」で、すでに昨年十二月二十二日に収録済み。藤原住職の他に花園大学学長で、自坊の臨済宗妙心寺派祥福寺（神戸市中央区）が被災した河野太通氏も出演する

▽鷲林寺は昨年の兵庫県南部地震で鐘楼堂が全壊するなど多大の被害を受け、藤原住職自身は被災直後から救援のボランティア活動に挺身した。その消息は藤原住職の自著『大震災の中から芽生える－私の阪神・淡路大震災体験－』に詳しく記されている。藤原氏は同番組で次のような内容を語っているという。「日本人は昨年の大震災やオウム真理教の一連の事件を教訓にしなければいけない。世界の国々の人から日本人は必ずしもよく思われていない。戦後五十年経った平成七年になぜ大震災が起こったのか。これを偶然と受けとめるだけでよいのだろうか。大自然からのメッセージだと前向きに考える必要がある。なぜ地球で長い間、人間が一番で居られたのか。それは考える頭と心があったから。大震災の経験を今後に生かしていくことが大事」。またボランティア活動に取り組む若者たちと若者の非行などについても言及しているそうだが、収録はあえて今回の震災で全壊全焼した理性院（西蔵全祐住職・神戸市東灘区御影石町）で行なったという。「やはりボランティア活動を始めたのが、西蔵さんの言葉と行動がきっかけだったから」と

▽震災で倒壊した鷲林寺の鐘楼堂の復興は完全に終わっていないが、“希望の鐘”として年末の三十一日の午後十一時半から参拝者らが除夜の鐘をついた。西宮在住の作家・藤本義一さんが数年前、偶然にこの除夜の鐘の音を耳にし、その音から同寺を捜し出したというエピソードを持つ。それから毎年、藤本さんは家族揃って除夜の鐘の音を聞きに同寺を訪れるとともに、藤原住職との親交を深めた。その縁で藤本さんは高野山大学の特別講師もつとめ、あるいは今回の本の巻頭の推薦文も寄稿した

▽藤原氏は新年の抱負を次のように語っている。「震災を通じてせっかく仲良くなった若者たちのつながりを今後につなげていきたい。また震災を単なる伝説に終わらせず、改めて心というものを真剣に考える年にしたい」。

(c) 1996中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)